

第五回企画展「天平万葉」歌 史料の手引き
パネルで取り上げた歌史料の現代語訳

パネル はじめに

館長 選 天平万葉の代表歌一首

あをによし 奈良の都は

咲く花の にほふがごとく 今盛りなり

(巻三・三三八 小野老)

(あをによし) 奈良の都は、咲く花の美しく照り映えるように、今まう盛りである。

パネル 聖武即位と天平改元

聖武天皇即位の詔の一部

進むも知らに退くも知らに、天地の心も勞しく
重しく、百官の情も辱み愧しみなも、神な
がら念し坐す。

(『続日本紀』養老八年二月四日第五詔)
進退をいかにすべきかわからないが、「瑞祥を現した」天地の神々にどう思われるか気がかりで心重く、百官の内心を思うと恥ずかしいばかりである、と神の身として思っている。

『続日本紀(しよくにほんぎ)』

平安時代初期に編纂された勅撰の歴史書『日本書紀』に続く六国史の第二にあたる。六九七年文武天皇元(から桓武天皇の七九一年 延暦十)まで九十五年間の歴史を扱つ。全四十巻。奈良時代の基本史料である。

天平改元 天平の文字がある亀が献上される

左京職、亀を献る。長さ五寸三分、

闊さ四寸五分。その背に文有りて云はく

「天王貴平知百年」といふ。

(『続日本紀』神龜六年六月二十日)

左京職が、長さ五寸三分、幅四寸五分の亀を献上した。その甲羅に文言があり、「天王貴平知百年(天皇は貴く

その治世は百年に及ぶ」とよめた。

パネル 大仏開眼

大仏造営のための黄金産出を喜ぶ聖武天皇

陸奥国に金を出だす詔書を書く歌

…敷ませる 四方の国には 山川を 広み厚みと
奉る 御調宝は 数へえず 尽くしもかねつ しか
れども わが大君の諸人を 誘ひたまひ 良き事を
始めたまひて 金かも たしげくあむむと 思ほして
下惱まずに 鶏が鳴く 東の国の 陸奥の 小田なる山
に 金ありと 申したまへれ 御心を 明らめたまひ…

(巻十八・四〇九四 大伴家持)

陸奥国で金が出たという詔書を書いた歌

…治められている四方の国々は山も川も広々と豊かなので、
奉る貢ぎ物や宝物は数えきれないほどで、挙げ尽くせない。
しかしながら、わが大君が人々を仏の道にお導きになり、
(大仏建立という)良いことをお始めになって、黄金が果
たしてあるのだからかとお思いになってお心を悩ませてお

られたところ(とりがなく)東の国の陸奥国の小田郡に
ある山に黄金があると奏上してきたので、お心も晴れ
晴れとなり…

パネル 天平の政争

恭仁京遷都 恭仁京讃歌

(天平)十五年癸未の秋八月十六日に内舎人
大伴宿禰家持が久邇の京を讀めて作る歌一首
今造る 久邇の都は
山川の さやけき見れば うべ知らずらし

(巻六・一〇三七 大伴家持)

(天平)十五年八月十六日に、内舎人大伴宿禰家持が
久邇京を讀めて作った歌一首

今造営中の恭仁の都は、その山と川のすがすがしい有様を見る
と、ここに都をおさだめになるのももつともなごと思われる。

国分二寺(国分寺・国分尼寺)建立の詔の一部
天下の諸国をして各七重塔一区を敬ひ造らしめ、
并せて金光明最勝王經・妙法蓮華經一部を写す

つむぐり…

『続日本紀』天平十三年

全国に命じて、各々つつしんで七重塔一基を造営し、あわせて金光明最勝王經と妙法蓮華經をそれぞれ一揃え書写させよ。

聖武天皇の子、安積皇子の死 安積皇子挽歌

(天平)十六年申申の春月 安積皇子の薨せし時

内舍人大伴宿祢家持が作る歌(その反歌)

愛しきかも 皇子の命の

あり通ひ 見しし活道の 道は荒れにけり

(巻三・四七九 大伴家持)

(天平)十六年二月、安積皇子が亡くなられた時に、

内舍人大伴宿祢家持が作った歌(その反歌)

なんと悲しいことだ。安積皇子がいつも通ってこ覧になった

活道への道は荒れてしまった。

仲麻呂の権勢と家持

大伴古慈悲の左遷

族を諭す歌(その反歌)

剣大刀 いよいよ研ぐべし

古ゆ さやけく負ひて 来にしその名ぞ

(巻二十・四四六七 大伴家持)

右、淡海真人三船の讒言に縁りて、出雲守

大伴古慈悲宿祢、任を解かる。ここを以て

家持この歌を作る。

族の者を諭す歌(その反歌)

(つるぎたち)いっそう心を研ぎ澄ますべきだ。昔から高潔な

一族として負い持つて来たその大伴という名なのだぞ。

右は、淡海真人三船の讒言によって、出雲守大伴古

慈悲宿祢が解任された。そこで家持はこの歌を作っ

たのである。

パネル 天平の歌びと

朱雀門の歌垣 天覧のにぎやかな歌垣

天皇、朱雀門に御して歌垣を覽す。男女二

百四十余人、五品已上の風流ある者、皆その中に

交雜る。正四位下長田王、従四位下栗栖王・門

部王、従五位下野中王等を頭とす。本末を

以て唱和し、難波曲・倭部曲・浅茅原曲・

広瀬曲・八裳刺曲の音を為す。都の中の士女をして縦に覽せしむ。歡を極めて罷む。

(『続日本紀』天平六年二月一日)

天皇は朱雀門に出御して歌垣を見た。「歌垣の参加者は」男女二百四十余人で、五品(五位)以上の風流心のある者は、みなその中に入りまじった。正四位下の長田王、従四位下の栗栖王・門部王、従五位下の野中主らを頭として、首尾と末尾をそれぞれに唱和させた。難波曲・倭部曲・浅茅原曲・広瀬曲・八裳刺曲の音楽を演奏し、都(平城京)中の人々に自由に觀覽させた。歡をきわめて終わった。

古歌を楽しむ天平びと

此來、古舞盛りに興り、古歳漸に晚れぬ。理に、共に古情を尽くし、同じく古歌を唱ふべし。故に、この趣に擬して、すなはち古曲二節を獻る。風流意氣の士、たまさか此の集へるが中にあらば、争ひて念ひを發し、心々に古体に和せよ。

わがやどの 梅咲きたりと 告げちらば
來と言ふに似たり 散りぬともよし

(卷六・二〇二 作者未詳)

春されば ををりにををり
鶯の 鳴くわが山齋ぞ 止まず通はせ

(卷六・二〇二 作者未詳)

このころ、古い舞が盛んに起り、古い年もようやく暮れようとしている。だから当然、おのおの古い情を傾け尽くして、ともに古い歌を歌うべきである。そこでこの趣旨に賛同して、古い歌曲二篇を献上するわけである。風流で気概のある者がたまたまこの集まったなかに居合わせたら、争って思いを述べ、思い思いに古い歌いざまに同調されたい。

わが家の庭の梅が咲いたと告げてやったら、来いと催促するようなものだ。梅はもう散ってしまつてもよい。(二〇二) 春になると枝もたわむばかりに梅の花が咲き、鶯の鳴くわが家の庭ですぞ。欠かさずにおいでください。(二〇二)

パネル 天平の四季

曆を意識した立夏の歌

卯の花の 咲く月立ちぬ
ほととぎす 來鳴きとよめよ ぶふみたりとも

(卷十八・四〇六 大伴家持)

卯の花の咲く月になった。ほととぎすよ、来て鳴き立
てておくれ。まだ花がつぼみであつても。

立夏に鳴くほととぎす

霍公鳥は、立夏の日に来鳴くこと必定なり。

(卷十七・三九八四左注 大伴家持)

ほととぎすは、立夏の日に来て鳴くものと決まつている。…

左注…歌の左についている注のこと。作歌事情などが注
記されている。

「暦」の普及と四季歌の多様化

季節を代表する素材(景物)の固定化

春 梅

正月立ち 春の来らば

かくしこそ 梅を招きつつ 楽しき終へめ

(卷五・八一五 大式紀卿)

正月になり、春がやってきたならば、毎年こうやって梅
の花を迎えて、楽しみのかぎりを尽くそう。

夏 ほととぎす

ほととぎす 待てど来鳴かず

あやめ草 玉に貫く日を いまだ遠みかも

(卷八・一四九〇 大伴家持)

ほととぎすはいくら待っても来て鳴かない。あやめ草を玉
に通す日がまだ遠い先のことだからなのか。

秋 萩

高田の 野辺の秋萩

このころの 暁露に 咲きにけむかも

(卷八・一六〇五 大伴家持)

高田の野辺の秋萩は、この近ごろの暁の露を受けて咲
き始めたことだろうか。

冬 雪

わがやどの 冬木の上に 降る雪を

梅の花かと うち見つるかも

(卷八・一六四五 巨勢宿奈麻呂)

わが家の庭の冬枯れの木の上に降った雪を、梅の花かと
つい見まちがえた。

虚構の恋

恋ひ恋ひて逢へる時だに

愛しき言尽くしてよ 長くと思はば

(巻四・六六一 大伴坂上郎女)

恋し続けて来て、やっと逢えた時ぐらいは、優しいことばの限りを尽くしてください。いつまでもとお思いでしたら。

旅に去にし 君しも継ぎて 夢に見ゆ

我が片恋の 繁ければかも

(巻十七・三九二九 大伴坂上郎女)

旅に出て行ったあなたが続けて夢に見えます。わたしの片思いがしきりにつづるからでしょうか。

人もなき 国もあらぬか

我妹子と 携ひ行きて たぐひて居らむ

(巻四・七二八 大伴家持)

誰もいない国でも無いものかなあ。あなたと手を取り合って行って、そこで寄り添っていたい。

うつつには さらにもえ言はず

夢にだに 妹が手本を まき寝とし見ば

(巻四・七八四 大伴家持)

現実には逢えるのなら、もう何も言うことはありません。せめて夢にだけでもあなたの手枕で寝たと見さえしたら(どんなにいいでしょう)。

悲恋(禁断の恋) 配流の相聞歌

都に残る女が、流罪になつた恋人へ贈つた歌

君が行く 道の長手を 繰り畳ね

焼き滅ぼさむ 天の火もかも

(巻十五・三七二四 狭野弟上娘子)

あなたが行く長い道のりを手繰り寄せて折りたたんで、焼き滅ぼしてくれるような天の火があつたらなあ。

配流地へ向かつ男が都に恋入へ贈つた歌

恐みと 告らずありしを

み越路の 手向に立ちて 妹が名告りつ

(卷十五・三七三〇) 中臣宅守

恐れおおいとはばかって口にしないでいたのに、越へと向かう路の峠に立ってとつとつあなたの名を口にしてみました。

パネル 波濤を越えて

遣唐使

春日に神を祭る日に、藤原太后の作らす歌一首

すなはち入唐大使藤原朝臣清河に賜ふ

参議従四位下遣唐使

大船に ま梶しじ貫き

この我子を 唐国へ遣る 齋へ神たち

(卷十九・四二四〇) 光明皇太后

春日で神を祭った日に、光明皇太后が作られた歌

つまり入唐大使藤原朝臣清河に賜ったもの

参議従四位下遣唐使

大船に左右の權をいっばいに取り付け、このいとしい子を唐国へ送り出します。守ってください、神々よ。

閏三月に、衛門督大伴古慈斐宿祢の家に
して、入唐副使同胡麻呂宿祢等に餞する歌

唐国に 行き足らはして 帰り来む

ますら健男に 御酒奉る

(卷十九・四二六一) 多治比鷹主

閏三月に、衛門督大伴古慈斐宿祢の家で、入唐副使大伴胡麻呂宿祢たちを送別した歌

唐国に行き役目を果たして帰ってこられるますらおの君にお酒を捧げます。

遣新羅使

栲衾 新羅へいます 君が目を

今日か明日かと 齋ひて待たむ

(卷十五・三五八七) 作者未詳

(たくぶすま) 新羅へいらっしやるあなたに逢える日を、今日か明日かと無事を祈りながら待ちましょ。

遣渤海使

一月十日に、内相の宅にして渤海大使

小野田守朝臣等に餞する宴の歌一首

青海原 風波なびき

行くさ来さ つつむことなく 船は早けむ

(巻二十・四五一四 大伴家持)

二月十日に、内相の邸で渤海大使小野田守朝臣たちを
送別した時の宴会の歌一首

青海原に風は静かに吹き、波もおたやかで、行きも帰りも何
のさわりもなく、船はきつと速いことでしょう。

パネル 越中一 天離る鄙へ

国守への決意 「大君の任けのまにまに」

天さがる 鄙治めにと 大君の 任けのまにまに
出でて来し 我を送ると…

(巻十七・三九五七 大伴家持)

(あまざかる) 鄙の地を治めるためにと、大君の仰せのま
まに、出かけてきた私を見送って…

大君の 任けのまにまに ますらおの 心振り起し
あしひきの 山坂越えて 天さがる 鄙に下り来…

(巻十七・三九六一 大伴家持)

大君の仰せのままに、ますらおの心を奮い立たせて、
(あしひきの) 山や坂を越えて、あまざかる(鄙)の地に下
つてきて…

越中三賦

二上山の賦

射水河 行きめぐる 玉くしげ 二上山は

春花の 咲ける盛りに 秋の葉の にほへる時に

出で立ちて ふりさけ見れば…

(巻十七・三九八五 大伴家持)

二上山の賦

射水河がふもとをめぐって流れゆく(たまくしげ)二上山は、
春花の盛りの時も、秋の葉の色づく時にも、外に出て振り仰
いで見ると…

布勢の海水に遊覧する賦

もののぶの 八十伴の男の 思ふごとく 心遣らむと
馬並めて うちくちぶりの 白波の 荒磯に寄
する 洗谿の 崎たもとほつ…

(卷十七・三九九一 大伴家持)

布勢の水海に遊覧する賦

(もののぶの) たくさんの官人たちが、親しい者同士で気晴らししようと、馬を連ねて、うちくちぶりの、白波が荒磯に寄せる洪谿の崎をぐるりとめぐり…

立山の賦

天さがる 鄙に名かかす 越の中 国内にうとと
山ほしも しじにあなむも 川ほしも さほに
行けども すめ神の うしはきいます
新川のその立山に…

(卷十七・四〇〇〇 大伴家持)

立山の賦

(あまざがる) 鄙の地のなかでも名高い越中の国中のいたるところに、山は数々あり、川はたくさん流れているが、国の神が鎮座されている新川郡のその名も高き立山には…

パネル 越中II 国守家持

諸郡巡行 越中国内を巡った時の歌

雄神河 紅にほぶ

娘子らし 葦附取ると 瀬に立たすらし

(卷十七・四〇二一 大伴家持)

雄神河が一面に赤く照り映えている。あでやかな少女たちが葦附を採るために瀬に立つてるらしい。

鵜坂河 渡る瀬多み

この我が馬の 足掻きの水に 衣濡れにけり

(卷十七・四〇二二 大伴家持)

鵜坂河には渡る瀬がいくつも流れているので、このわたしの乗る馬の足がかきあげる水しぶきで、着物がすっかり濡れてしまった。

婦負河の速き瀬ごとく 篝さし

八十伴の男は 鵜川立ちけり

(巻十七・四〇二三 大伴家持)

婦負河の流れの速い瀬ごとく、かがり火をたいて、たくさんの官人たちが鵜飼を楽しんでいる。

立山の雪し消らしも

延槻の川の渡り瀬 錨浸かすも

(巻十七・四〇二四 大伴家持)

立山の雪が解けて流れてきたらしい。延槻河の渡り瀬でも、ふえた水かさであぶみまでも水に濡らした。

之平路から 直越え来れば

羽咋の海 朝なぎしたり 船櫃もがも

(巻十七・四〇二五 大伴家持)

之平路の山道をまっすぐに越えてくると、羽咋の海は今までに朝屈している。船の櫂でもあつたらよいのに。

とぶさ立て 船木伐るといふ 能登の島山

今日見れば 木立茂しも 幾代神びそ

(巻十七・四〇二六 大伴家持)

とぶさをたてて祭りをしては船材を伐り出すという能登の島山を、今日見ると木立が茂っている。幾代を経ての神々しさなのか。

香島より 熊来をさして 漕ぐ舟の

梶取る間なく 都し思ほゆ

(巻十七・四〇二七 大伴家持)

香島から熊来に向けて漕ぎ進む舟が櫂の手を休めることのないように、ひっきりなしに都のことが思われる。

妹に逢はず 久しくなりぬ

饒石川 清き瀬ごとく 水白はへてな

(巻十七・四〇二八 大伴家持)

あの子に逢わないまま日数がたってしまった。無事かどうか、饒石川の清らかな瀬ごとに水占をしてみよう。

珠洲の海に 朝開きして 漕ぎ来れば

長浜の浦に 月照りにけり

(卷十七・四〇二九 大伴家持)

珠洲の海に朝早く舟を出して漕いで来ると、長浜の浦にはもう月が照り輝いていた。

出金詔書を賀く歌 大伴氏の忠誠心をつたう

陸奥国に金を出だす詔書を賀く歌一首 并せて短歌

大伴の 遠つ神祖の その名をば 大久米主と

負ひ持ちて 仕へし官 海行かば 水漬く屍 山行

かば 草生す屍 大君の 辺にこそ死なぬ 顧みは

せじと言立て… (卷十八・四〇九四 大伴家持)

反歌三首(うち一首)

天皇の 御代栄えむと 東なる 陸奥山に 金花咲く

(卷十八・四〇九七 大伴家持)

陸奥国で金が出たという詔書を寿いだ歌一首と短歌

大伴の遠い祖先の、その名を大久米主と名乗りお仕えして

きた役目柄「海を行くのならば水につかつた屍、山を行く

のなら草むした屍をさらしても、大君のそばで死のう。後

悔はしない」と誓ってきた…

反歌

天皇の御代が栄えるしるしとして、東の国の陸奥国の山に黄金の花が咲いた。

パネル 越中Ⅲ 越中秀吟

越中秀吟 越中の春、憂愁の歌

春の苑 紅にほふ

桃の花 下照る道に 出で立つ娘子

(卷十九・四一三九 大伴家持)

春の庭園は一面に赤く照り映えている。紅色に咲く桃の花、その樹の下まで赤く照り輝く道にふと立ちあらわれるおとめの姿。

春まけて もの悲しきに

さ夜ふけて 羽振き鳴く鳴 誰が田にか住む

(卷十九・四一四一 大伴家持)

春になつてなんとなく悲しい時に、夜も更けてから羽ばたきながら鳴く鳴は、誰の田んぼに住みついているのであろうか。

春の日に 萌れる柳を 取り持ちて

見れば都の 大路し思ほゆ

(巻十九・四一四二 大伴家持)

春の日の光のなかに芽をふいている柳の枝を手に取り持ちて見ると、奈良の都の大路が思い出される。

もののふの 八十娘子らが 汲みまがふ

寺井の上の 馨香子の花

(巻十九・四一四三 大伴家持)

(もののふの)たくさんの少女たちが入り乱れて水を汲んでいる寺井のほとりに群がり咲いているかたかこの花。

帰京 越中との別れの歌

石瀬野に 秋萩のき

馬並めて 初鳥狩だに せすや別れむ

(巻十九・四二四九 大伴家持)

石瀬野で秋萩を踏みしだき、馬を並べてせめて初鳥狩だけでもと思っていたのに、それもせずに別れることとなるのか。

しなざかる 越に五年 住み住みて

立ち別れまく 惜しき宵かも

(巻十九・四二五〇 大伴家持)

(しなざかる)越中の国に五年ものあいだ住み続けて、今宵かぎりに別れて行かなければならないと思つて、名残惜しい。

玉粹の 道に出で立ち 行く我は

君が事跡を 負ひてし行かむ

(巻十九・四二五一 大伴家持)

(たまほこの)道に旅立ちして行くわたしは、あなたの治績を背負つて行く。

製作・著作 高岡市万葉歴史館
富山県高岡市伏木一宮一の十一
電話〇七六六・四四・五五一
http://www.manriek.com
発行 平成十七年九月二十八日

図録 第五回企画展 天平万葉 定価 三〇〇円(も
あわせてご利用ください。)